

自然会話の教材化とディスコース・ポライトネス理論1: 対人コミュニケーション論としてのディスコース・ポライトネス 理論の考え方

東京外国語大学大学院地域文化研究科
言語教育学講座
宇佐美まゆみ
usamima@uifs.ac.jp

はじめに

本稿では、言語教育の教材として自然会話を活用する意義を、対人コミュニケーション論としてのディスコース・ポライトネス理論の観点から論じ、自然会話を素材とした教材の枠組みとそれに基づく試作版を紹介する。

本稿は、二部にわたる論考の第一部である。本稿では、自然会話を教材として活用・指導する際には、対人コミュニケーションを円滑に行うための視点を提供する「ディスコース・ポライトネス理論」を紹介する。第二部では、創作された会話と自然会話の違いを考察し、自然会話を教材として用いることの意義を論じる。最後に、自然会話を素材とした教材の制作の方針を述べ、その試作版を紹介する。

社会の中で人間が生きていくには、コミュニケーションを円滑に行っていくことが不可欠である。それは、第二言語によるコミュニケーションにおいても同様である。ここでは、円滑な人間関係を確立・維持するための原則として、ブラウンとレビンソンがまとめた「ポライトネス理論」(Brown & Levinson 1987)をさらに発展させた「ディスコース・ポライトネス理論」(宇佐美, 1998, 2001a, b, c, 2002, 2003b, Usami 2002)を紹介し、「ディスコース・ポライトネス理論」の視点が会話教材開発に示唆することを論じる。

1. ブラウンとレビンソンのポライトネス理論¹

従来、言語学における「ポライトネス」の研究は、相手、状況、場面に応じた言語形式の使い分けに焦点をおいたいわゆる「ことば使いの丁寧さ」を扱う、研究が盛んであった。しかし、ブラウンとレビンソンは、ポライトネスを、円滑な人間関係を確立・維持するための言語戦略と捉え、相手や状況に応じた規範的な言語形式の使用を、固定的なものではなく、可変的な戦略として捉えた。ブラウンとレビンソンのポライトネス理論は、「フェイス」という鍵概念に基づいて操作的に定義した「ポライトネス」について、「フェイス」という鍵概念、「フェイス侵害度」の見積もりの公式、具体的な戦略、戦略の選択を決定する状況、の4つの側面からまとめたものと言える(詳細は宇佐美, 2001a, 2002, Usami, 2002等を参照のこと)。

以下では、まず、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論の概要を紹介する。

1.1. 「フェイス」という鍵概念

ブラウンとレビンソンのポライトネス理論は「フェイス」という概念を鍵概念としている。すなわち、人間には、人と人とのかわり合いに関する「基本的欲求」として、「ポジティブ・フェイス(positive face)」と「ネガティブ・フェイス(negative face)」という以下の二種類のフェイス(欲求)があると捉える。

ポジティブ・フェイス: 他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたいという欲求。(相手に近づきたいという欲求、親和欲求)

ネガティブ・フェイス: 他者に邪魔されたり、立ち入られたくないという欲求。(相手に立ち入られたくないという欲求、自律欲求)

ブラウンとレビンソンは、この二種類のフェイスを侵害する行為を、「フェイス侵害行為(Face Threatening Acts)」と呼び、「ポライトネス」は、対話相手に対する「フェイス侵害(Face Threatening: FT)度」を軽減するためにとる「言語戦略」、すなわち、相手の二種類のフェイスを保つための言語戦略として捉えられるとした。これが、ブラウンとレビンソンが言う「ポライトネス」の「操作的定義」である。

1.2. 「フェイス侵害度」の見積もりの公式

ブラウンとレビンソンのポライトネス理論を、それまでの言語形式に重きをおいたポライトネス研究、および、語用論的ポライトネス研究を超える、より包括的なものになっている点の一つが、「フェイス侵害度見積もりの公式」を提示したことである。これは、具体的に数値化できるわけではないが、「フェイス侵害度(Wx)」は、三つの要因によって総合的に規定されるとして、以下のように公式化している。

$$W(x) = D(S, H) + P(H, S) + R(x)$$

Wx: フェイス侵害度(FT度)、行為(x)が相手のフェイスを脅かす度合い

D: 話し手(Speaker)と聞き手(Hearer)の「社会的距離(Social Distance)」

P: 聞き手(Hearer)の話し手(Speaker)に対する「力(Power)」

Rx: 特定の文化で、ある行為(x)が「相手にかかる負荷度」の絶対的順位に基づく重み(absolute ranking of imposition)

つまり、ある行為(x)が相手のフェイスを脅かす度合い(Wx)、すなわち、フェイス侵害度(Wx)の重みは、xという行為(例えば、旅行先で特定のものを購入してもらうよう依頼する)が、ある特定の文化の中でどのくらい相手に負担をかけると見なされているかという「相手にかかる負荷度(Rx)」と、話し手と聞き手の「社会的距離(D)」(対称的關係)、聞き手の話し手に対する「相対的力(P)」(非対称的關係)の三要因が加算的に働いて決まってくるとする。そして、xという行為が相手にかける「負荷度(Rx)」の重みづけは、各々の文化によって異なるとしている。

1.3. 具体的な戦略

ブラウンとレビンソンの枠組みでは、「ポライトネス」は、「フェイス侵害度(Wx)」

¹ 内容の関係上、宇佐美(2001a, 2002)と異なる部分もあることをご断りしたい。

に応じて使い分けられる「話者の自発的な戦略」として捉えられている。但し、ここで言う「戦略」は、必ずしも意識的・自覚的であるという意味ではない。そして、以下の5つが主要戦略としてあげられている。いわゆる「ポライトな」言語行動の分析は、主に、以下の、が中心となっている。

- ① フェイス侵害度の軽減行為を行わず、直接的な言語行動をとる。(without redressive action, baldly)
- ② ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー(positive politeness strategy)
- ③ ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー(negative politeness strategy)
- ④ 伝達意図を明示的に表さない(ほのめかす)。(off record)
- ⑤ フェイス侵害行為 (Face Threatening Acts: 以後、FTA)を行わない。(doing no FTA)

②、③、④ について、ブラウンとレビンソンは、さらに、ポジティブ・ポライトネスの主要戦略を15、ネガティブ・ポライトネスの主要戦略を10、オフ・レコードの主要戦略を15 挙げている。これら主要戦略は、さらにいくつかの、より具体的な戦略に分類されているが、ここでは、各主要戦略の主な例をあげるにとどめる。

「フェイス侵害度の軽減行為を行わず、直接的な言語行動をとる」の直接的な言語行動とは、フェイス侵害度の見積もりの公式により、フェイス侵害度が低い場合や、緊急の場合等、物事を簡潔に述べたほうが良い場合に適用される。(例「危ない!」)「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」とは、相手の他者から認められたいというポジティブ・フェイスを満たすように、相手の何かを誉めたり、共通の興味を強調したり、相手を楽しくさせるような冗談を言ったりすることである。「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」とは、他者に立ち入られたくないという相手のネガティブ・フェイスを保つための言語戦略である。例えば、「今、少しお話してもよろしいでしょうか?」というように、相手に断る余地を与えるような、間接的な表現をするということが挙げられる。「伝達意図を明示的に表さない」とは、例えば、傘を借りたい場合に、依頼をはっきり言語で表現しないで、「今日、傘を持ってくるのを忘れてしまったんです...。」のように、ほのめかすにとどめる場合である。「FTA を行わない」は、相手のフェイスを脅かすような行為はしない、つまり、傘を借りたいという意を表明しないし、ほのめかしもしないということである。ブラウンとレビンソンは、この枠組みで、ほとんどの言語・文化におけるポライトな言語表現が説明できると主張した。

1.4. ストラテジーの選択を決定する状況

ブラウンとレビンソンは、さらに、上記5つの主要戦略のどれを選択するかは、相手のフェイス侵害度に応じて決定される傾向にあるとして、「戦略の選択を決定する状況」を、以下の図1のように表している。

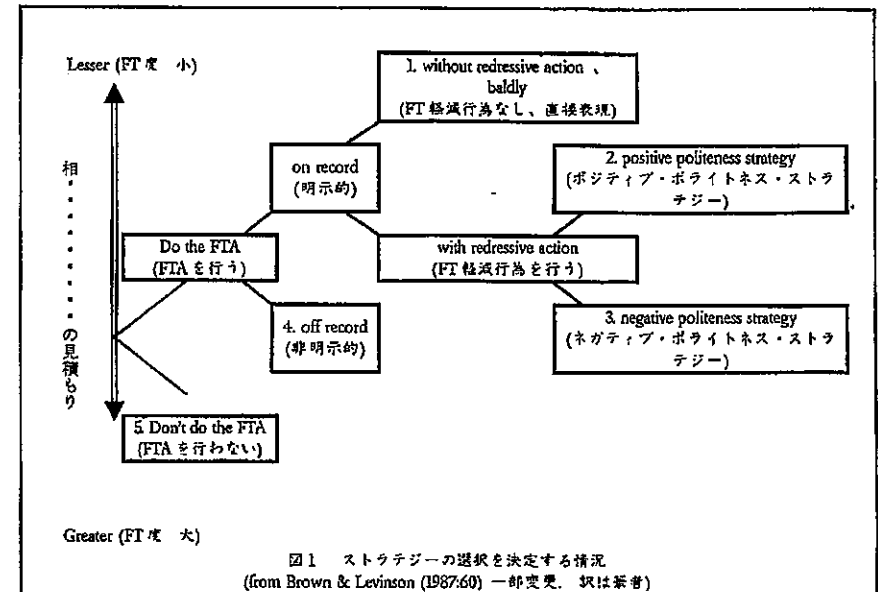


図1 ストラテジーの選択を決定する状況
(from Brown & Levinson (1987:60) 一部変更、訳は筆者)

彼らのこの図は、フェイス侵害度が比較的高い場合は非明示的戦略が選択されやすく、フェイス侵害度が小さくなるにつれ、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが、順に選択されやすくなることを示している。つまり、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーは、話し手が「相手のフェイス侵害度」を低く見積もった場合に用いられやすく、フェイス侵害度が最も低いと見積もられた行為の場合は、直接表現が選択されやすいということである。

1.5. ブラウンとレビンソンのポライトネス理論のまとめ

ブラウンとレビンソンのポライトネス理論の最も画期的な点の一つは、「フェイス侵害度見積もりの公式: $Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$ 」を打ち立てたことである。この公式のように、社会的要因が言語行動に与える影響を、一つの連続体上に表すことができると捉えることによって、ポライトネス行動を、固定的言語表現の丁寧度の問題としてではなく、動的で柔軟、且つ、体系的に捉えることが可能になった。

この理論のもう一つの斬新な点は、これまで、「ポライトだ」という一般的概念とは合入れなかったような、「仲間うちのマーカーを使う」ということや、「冗談を言う」というようなことを、「ポジティブ・ポライトネス」として、彼らの定義するポライトネスの中の重要な言語戦略として前面に打ち出したことである。このような、広義の「ポライトネス」の概念を提出することによって、「ポライトネス研究」を、通常のことば遣いの規範から外れている言葉や言語表現としては丁寧度が低い表現でも、不快に感じないこともあるのはなぜかというような、

まさに「対人コミュニケーション」を円滑に行うという観点からの疑問や興味にも答へ得るものに発展させたとと言える。

しかし、この理論が、個別言語の特徴に左右されない、真に公平な同一の枠組みで、各言語のポライトネスを比較・検討できる普遍的な理論なのかという観点から見ると、大きくは以下のような3つの問題点がある。

- ① 基本的に、一発話行為レベル、多くて幾つかの発話行為の連鎖(sequences)レベルの分析に留まっており、より長い談話レベルから見たポライトネスを扱っていない。それが、言語構造が異なる言語における「ポライトネス」の比較・対照を困難にしており、その結果として、その「普遍性」に対する疑問を誘発することになっている。
- ② ポライトネスを発話行為レベルにおけるフェイス保持のストラテジー(Face-saving strategy)として捉えているため、一見、「フェイス侵害行為」が無いと見られる「日常会話」等における「失礼のない状態」、換言すれば、「ある言語行動があって当たり前で、それが欠如すると初めてポライトでないと感じられるようなタイプのポライトネス」(「無標ポライトネス」、後述)をうまく説明できない。
- ③ フェイス侵害度の見積もりに際して、現実には、話し手の見積もりと、聞き手の見積もりが異なる場合もままある。そのずれの度合いによっては、話し手の意図に反して、聞き手が、話し手の言語行動を失礼だと受け取る場合もあるだろう。このような聞き手の側からの観点や、話し手と聞き手の相互作用の観点から、この理論には十分に組み込まれていない。

これらの問題点を克服するために筆者は、「ディスコース・ポライトネス」という概念を導入し、以下のような「ディスコース・ポライトネス理論」を発展させた。

2. 「ディスコース・ポライトネス理論」

ディスコース・ポライトネス理論(宇佐美, 2001a, b, c, 2002, 2003b, Usami 2002)は、ポライトネスを、「文/発話行為レベル」からだけでなく、「談話レベル」で捉えることによって、言語構造が異なる言語におけるポライトネスを同一の枠組みで比較対照し、その普遍的原則を捉えることを可能にしようとするものである。その大きな特徴は、「文/発話行為レベル」から「談話レベル」へと単に単位を拡大しただけではなく、談話行動を構成する諸要素それぞれの働きと、それらの要素の機能の「総体」をも主要な研究対象に含める。談話それ自体も一変数として扱うことによって、ポライトネス研究を、「言語表現の丁寧度を順位づける」という形の従来の「絶対的ポライトネス」の研究から、「ポライトネス効果は、言語表現それ自体の丁寧度ではなく、談話の基本状態(後述)からの逸脱の度合いに応じて相対的に生まれてくるものである」とする「相対的ポライトネス」の研究へと拡大するものである。話し手と聞き手の相互作用を考慮に入れて、ポライトネス・ストラテジー(話し手の視点)と、ポライトネス効果(聞き手の視点)を区別して考える、という3点である。具体的な分析対象には、スピーチレベルシフト、話題導入の仕方や頻度、あいづちや終助詞の使用法や頻度、前置きの有無、依頼までの前置き談話の流れ、ほめ談話の流れ、ほめに対する返答の連鎖等々がある。

以下では、ディスコース・ポライトネス理論の基本概念を述べた後、異文化間コミュニケーションの研究結果をディスコース・ポライトネス理論に基づいて解釈する。

2.1. 「ディスコース・ポライトネス理論」における基本概念・用語²⁾

「ディスコース・ポライトネス」とは、「一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である」(宇佐美, 2001 等)と定義される。

ディスコース・ポライトネス理論における重要な新しい視点は、ポライトネスを、「言語行動におけるいくつかの要素がもたらす機能のダイナミクスの総体」として捉えるということにある。そして、そのように捉えたポライトネスを「ディスコース・ポライトネス(以降 DP)」と呼んで、「文/発話レベル」のみから見たポライトネスと区別する。

また、話し手と聞き手の「フェイス侵害度の見積もりの差(De 値)」という「相互作用」をポライトネス理論の体系に組み込む。

ディスコース・ポライトネス理論において、新しく提出された鍵概念の主なものは、以下の6つである。基本状態(discourse default)、「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」、「有標行動」と「無標行動」有標行動から生み出される3種のポライトネス効果、フェイス侵害度の見積もり差(De 値)、「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」。以下、それぞれについて解説する。

また、以下の図2に、特定の「活動の型」における「無標ポライトネス」としての「ディスコース・ポライトネス」の例を提示する。

「談話の基本状態(discourse default)」

ディスコース・ポライトネス理論が新たに組み込んだ、これまでのポライトネス研究では扱われてこなかった最も重要な観点は、上述のような「ディスコース・ポライトネス」を構成する諸要素が「当該談話に占める構成比率」や「諸要素の頻度の平均」、「談話展開の典型」などを、当該談話の「談話の基本状態(discourse default)」という「変数(parameter)」として捉えるということである。当該談話には、いろいろな要素の基本状態がある。ディスコース・ポライトネス理論では、種々の「ディスコース・ポライトネス」には、それぞれの「談話の基本状態」があることを想定し、実際の個々の発話の効果としての「ポライトネス効果」は、その「基本状態」を基にして、相対的に生まれてくるものであると捉えるのである。

「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」

ポライトネス(相手のフェイスを侵害しないもの)という観点からは、「談話の基本状態」は「無標ポライトネス(unmarked politeness)」であると捉えられる。

ブラウンとレビンソンのポライトネス理論におけるポライトネスは、基本的には、依頼行為などのように、相手のフェイスを脅かす「フェイス侵害行為」を行わざるを得ないときに、「相手のフェイス侵害度を軽減するためにとるストラテジー」として捉えられている。しかし、このように、「相手のフェイス侵害度を軽減するためにとるストラテジー」としてポライトネスを捉えると、一見 FTA がないように見える「日常会話(ordinary conversation)」などにおける「ポライトネス」をうまく

²⁾ 内容の関係上、宇佐美(2002, 2003b)と異なる部分もあることをお断りしたい。

説明できないという問題点があった。なぜならば、我々の日常生活においては、「フェイス侵害度軽減行為」とは異なるタイプのポライトネスもあるからである。それは、「守られていて当たり前で、期待されている言語行動が表われないときに、初めてそれが意識され、ポライトではないと捉えられる」という類のものである。

ポライトネスの普遍理論を確立するためには、このような、一見フェイス侵害がないように見える日常会話におけるポライトネスも併せて、より体系的にポライトネスを捉える必要がある。そのためには、ポライトネスを、「有標ポライトネス (marked politeness)」と「無標ポライトネス (unmarked politeness)」に分けて考え、それぞれを体系化した上で、さらに、双方を包括する理論を構築する必要がある。談話の基本状態は、ポライトネスの観点からは、「無標ポライトネス」である。そして、「談話の基本状態」を構成する言語行動を「無標行動 (unmarked behavior)」、基本状態から逸脱する行動を、「有標行動 (marked behavior)」と呼ぶ。有標行動と無標行動については次に説明する。

有標行動と無標行動

ディスコース・ポライトネス理論では、特定の談話の「談話の基本状態」は、ポライトネスを相対的に捉えるために同定する必要があるものである。つまり、ディスコース・ポライトネス理論では、各々の談話の「談話の基本状態」を基にして、そこからの「動き」に着目して「相対的ポライトネス」の体系化を試みる。談話の基本状態を構成する言語行動を「無標行動」と呼び、基本状態から逸脱した言語行動を「有標行動」と呼ぶ。DPの基本状態は、ポライトネスの観点からは、「無標ポライトネス」であり、それを構成する諸要素は、「無標行動」である。

基本状態からの逸脱行動としての「有標行動」は、何らかの「ポライトネス効果」を生み出す。以下の図2の例で言うと、「初対面の会話」における「ディスコース・ポライトネス」の一要素であるスピーチレベルの無標スピーチレベルは、「敬体」である。そのため、このディスコースにおいては、「常体」の使用は有標行動となり、何らかの機能を生む。例えば、「初対面の会話」において、文脈によっては、常体を使うことによって、親しみを表すということなどが考えられる。一方、「友人・夫婦の会話」においては、無標スピーチレベルは「常体」であると考えてよいだろう。そのため、このディスコースにおいては「敬体」の使用が有標行動となり、文脈に応じて冗談や皮肉、改まりといった何らかの機能を生むのである。つまり、談話の基本状態を構成する諸要素は、無標行動、つまり、あって当たり前のものであり、ディスコース・ポライトネスを形作り、その「談話の基本状態」が、諸要素の総体としても、各要素の状態としても、ポライトネスの観点からは、「最適の状態」であると捉える。それ故に、もし、その中の何かが欠けた場合や、或いは、何かが多すぎる場合、それが意識され、ポライトでないとして認知されたり、その他、何か特別の効果が生まれると想定するのである。

「初対面の会話等」の
ディスコース・ポライトネス
(無標スピーチレベルは、敬体)

「友人・夫婦の会話等」の
ディスコース・ポライトネス
(無標スピーチレベルは、常体)



無標スピーチレベルからの逸脱(有標行動)

図2 特定の「活動の型」における「無標ポライトネス」としての「ディスコース・ポライトネス」

注：・外側の大円は、諸要素の総体としてのディスコース・ポライトネスを表す。

・内側にある小円は、例えば、「あいづち」や「話題導入」の頻度など、DPの要素と考えられるものを想定し、象徴的に表したものである。その数は、上記のように5つとは限らない。

有標行動から生み出される3種の「ポライトネス効果」

ディスコース・ポライトネス理論では、「フェイス侵害度軽減行為」は、一種の「有標行動」であると捉える。有標行動がもたらし得る効果には、以下の図3で示すように、プラス・ポライトネス効果、ニュートラル・ポライトネス効果(言語的談話効果等)、マイナス・ポライトネス効果の3通りがある。これらは、言い換えると、「心地よい」という効果、「ニュートラル」な効果(強調や話題転換などのように、特にポライトでも不愉快でもない)、「不愉快」な効果である。

のニュートラル・ポライトネス効果を談話レベルで考えるには、先に説明した「談話の基本状態」という概念が必要になる。のマイナス・ポライトネス効果については、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論では、「フェイス侵害度軽減行為」としての「ポライトネス・ストラテジー」を行わないこと、すなわち、「相手のフェイス侵害度を軽減する努力をしない」ことが自ずと生む効果として含意されていたと言えるが、体系的には扱われていなかった。

これら3つの効果は、「話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積もりの差」を数値に置き換えた形で一つの連続線上に表すことによって、体系的に捉えることができる。(図3参照)そうすることによって、「マイナス・ポライトネス効果」、すなわち、「不愉快」「怒怒無礼」も、ディスコース・ポライトネス理論で包括的に説明することが可能になるのである。この話し手と聞き手の「フェイス侵害度の見積もり差(De値)」は、「ポライトネス効果」の指標となるものである。

フェイス侵害度の見積もり差(Discrepancy in estimations: De値)

「(フェイス侵害度の)見積もり差(De値)」とは、「話し手と聞き手の、話し手の言語行動のフェイス侵害度についての見積もりの差」を数値化して得られる値である。ポライトネス値は、絶対的な数値として算出できるわけではないが、「0」を中

心とする-1から+1までの範囲の連続線上に分布すると仮定する。すなわち、「見積もり差(De値)」を縦軸とする連続線に示すと、「見積もり差(De値)」と「ポライトネス効果」の関係は、以下の図3のようになる。

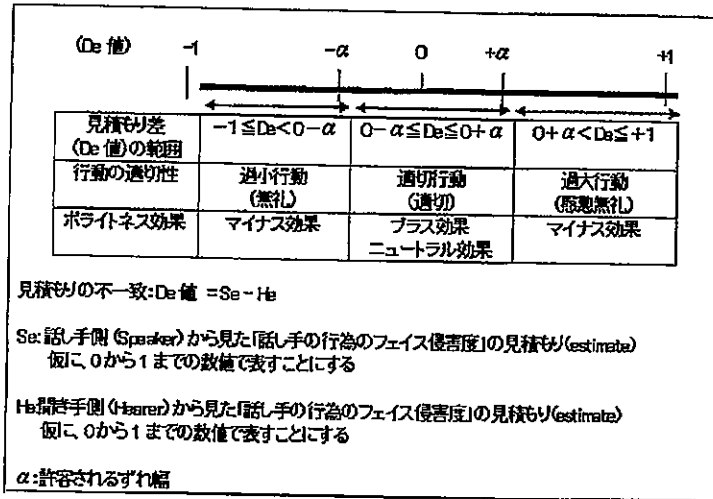


図3 「見積もり差(De値)」・「行動の適切性」・「ポライトネス効果」

例えば、これまで、敬語研究などでは、あまり扱われてこなかった「慇懃無礼」は、ディスコース・ポライトネス理論で解釈すると、「相手が、こちらが当該の状況で適切であると考える言語行動よりも、『許容できるずれ幅』を超えて、『丁寧な表現』を使用した」場合である。つまり、「話し手が、聞き手が期待する、当該の状況における『フェイス侵害度の見積もり』に応じた言語表現よりも、『許容できるずれ幅』を超えて、『丁寧な表現』を用いた」場合であるということになる。

このように、「ポライトネス効果」を「談話の基本状態」に基づいて相対的に捉えるだけでなく、話し手と聞き手双方の「フェイス侵害度の見積もり」や「談話の基本状態の認知」の「ずれ」という「相互作用」を体系に組み込んだという点も、ディスコース・ポライトネス理論における「新しいポライトネスの捉え方」の一つである。

ポライトネス効果の認定の仕方は、有標ポライトネスと無標ポライトネスで異なる。有標行動の「ポライトネス」を捉える際は、当該の談話の「無標ポライトネス」の「基本状態」を同定した上で、「有標行動が生み出す効果」としてのポライトネスを、有標行動が生じたコンテキストや発話内容を考慮して同定していく。「有標ポライトネス」の効果は、「話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積もりの差」として捉えられるが、無標ポライトネスの場合は、「どのような談話、或いは、談話展開を『談話の基本状態』と捉えるか」という「話し手と聞き手の『基本状態の認知』の差」が、以下に述べるポライトネス効果の指標である「見積もり差(De値)」となる。(詳細は、宇佐美(2002)を参照のこと)

このように、「ポライトネス効果」を相対的に捉えるだけではなく、話し手と聞き手双方の「フェイス侵害度の見積もり」や「基本状態の認知」の「ずれ」という「相互作用」を体系に組み込んだという点も、ディスコース・ポライトネス理論における新しいポライトネスの捉え方の一側面である。これは、「異文化接触場面」でしばしば生じる誤解に基づく問題を記述する際の一つの枠組ともなりえるだろう。

「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」

言語形式について言うなら、「行く」より「いらっしゃる」のほうが、丁寧度が高いとか、その他の条件が一定ならば、直接的表現より間接的表現のほうが、よりポライトであるというような捉え方は、「絶対的ポライトネス」を扱っている。しかし、いつも常体で話す相手(「基本状態」が常体)に「敬語」を使っていやみを言うなどということは、たとえ、敬語を使っている、「マイナス・ポライトネス効果」と捉えられる。つまり、常体が無標である談話において「有標行動」となる敬語の使用は、言語形式自体は、「敬体」であるにもかかわらず、失礼だと感じさせたり、不愉快にさせたりする等の「マイナス・ポライトネス効果」を生み出すのである。一方、仲間意識を強めるために用いる「ため口(友達同士の言葉遣い)」は、言語表現の丁寧度は低くても、プラス・ポライトネス効果として機能する。

このように考えると、実質的に、ポライトネスの効果を生み出すのは、「言語形式」それ自体の丁寧度ではなく、ある特定の「談話」の「基本状態」からの離脱や回帰という、言語行動の「動き」であると考えられる。これが、「相対的ポライトネス」という捉え方である。

2.2. 文化による「基本状態」の違い

ここでは、ディスコース・ポライトネス理論の「基本状態」について具体的な研究例を挙げて紹介する。

「依頼」や「断り」など、従来、文化による違いが指摘されてきた研究も、ディスコース・ポライトネス理論の観点から見ると、「依頼談話」や「断り談話」の「基本状態」は言語・文化によって異なる、ということが明らかにされた研究とみなすことができる。それらの結果を単に「文化差の記述」として留めておくのではなく、特定の文化におけるある談話の「基本状態」として捉え、さらに、そこからの「有標行動」の「動き」が「ポライトネス効果」を生むという観点から捉え直すことによって、異文化間ミス・コミュニケーションの原因の解明につなげていくことができる。

例えば、日本語会話と中国語会話における依頼行動を、依頼側による働きかけという観点からその特徴を談話レベルで分析し日中の依頼行動を比較した研究(謝1999, 2001)では、依頼行動の発話の展開パターンの基本状態が日中で異なると指摘している。以下に、その中の典型的な例をあげ、ディスコース・ポライトネス理論の観点から簡単に考察する。

以下の例1に日本語会話における依頼談話のやりとりを示す。

例1 日本人大学生同士の依頼の会話(BF02 女性先輩、YM05 男性後輩)³

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容	
1	1-a	/	BF02	あ、あのね、「YM5」君、//	呼びかけ
2	1-b	*	BF02	お願いがあるんだけど....	前置き
3	2	*	YM05	はい。	
4	3	*	BF02	なんだっけ、1回目のときプリント、私忘れちゃって、なくしてしまって、確か「人名」さんのプリントだと思うんですけど。	状況説明
5	4	*	YM05	「人名」？。	
6	5	*	BF02	うん。	
7	6	*	BF02	私、今度、貸してもらえる？。	依頼1
8	7	*	BF02	というか、コピーさしてほしんだけど....	
9	8	*	YM05	はい。	
10	9	*	BF02	あっ、いま、もってる？。	状況確認
11	10	*	YM05	いや、もってないんです。	
12	11-1	/	BF02	じゃ、今度でいいんで、	
13	12	*	YM05	はい。	
14	11-2	*	BF02	来週にでも、貸してもらえますか？。	依頼2
15	13	*	YM05	えっ、あっ、いいですよ。	

まず、依頼を行った BF02 の発話に注目すると、1)呼びかけ、2)前置き、3)状況説明、4)依頼1、5)状況確認、6)依頼2、という発話の連鎖があるが、このような比較的長いやりとりがあるのが、日本語会話の特徴だと言う、すなわち、ディスコース・ポライトネス理論では、「基本状態」だと解釈できる。

一方、中国語の依頼談話の典型的なものは、以下のようなものであった。

例2 中国人大学生同士の依頼の会話(CBF02 女性、CSF06 女性)

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容	
1	1-1	/	CBF02	喂、CSF6、// あっ、CSF6 ちゃん、	注意喚起
2	1-2	*	CBF02	你的数学笔记本能不能借我用一下？ 数学のノートちょっとかしてくる？。	依頼1
3	2	*	CSF06	好的呀。 いいよ。	

³ 文字化は宇佐美(2003a, 2006)の「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」に従っている。中国語会話の文字化も、BTSJ に準じて行っている。

中国語では、CBF02 は、注意喚起のすぐ後に依頼発話を発しており、前置きや状況説明などがない。また、被依頼者である CSF06 も、確認のような発話は行わず、すぐに了承をしている。

ディスコース・ポライトネス理論に基づいてこれらの結果を解釈すると、日本語と中国語の依頼談話の基本状態が異なるということになる。このような結果を踏まえると、もし、中国語母語話者の日本語学習者が、「注意喚起」の後、すぐに「依頼発話」に移るという中国語の基本状態である発話連鎖を日本語に転移させた場合、日本人は、それを、唐突だとか、失礼だということに感じてしまう可能性もある。一方、中国語において、日本式の長い発話連鎖を伴う依頼の仕方をしたら、それは、中国語においては有標行動となり、よそよそしいと感じられたり、何か他意があるのではないかと勘ぐられたりする可能性もある。

これらの印象は、依頼談話における「言語形式のポライトネス・レベル」が適切であっても、起こりうることである。また、これは、依頼された側についても同様の観点から考えることができる。依頼側と依頼された側の依頼の仕方についての見積もりが一致してさえいれば、依頼側が長い発話連鎖を行う形で依頼しようと、単刀直入に依頼しようと、依頼された側は、その発話連鎖を、ポライトネスの観点からは適切な行動となるのである。

この様に、様々な言語と文化における、重要な発話行為の「基本状態」の違いを分析することによって、母語話者と非母語話者との相互作用における誤解や問題点を考察することができる。「基本状態」という概念を導入することによって、文法の誤りや、敬語の使用法が適切でなかったというようなレベルを超えた、談話レベルから、異文化間ミス・コミュニケーションが起こる理由を理解、解釈できるようになるのである。このような理解は、より円滑な異文化間コミュニケーションを促進することにつながるであろう。

3. ディスコース・ポライトネス理論が自然会話教材開発に示唆すること

ディスコース・ポライトネス理論は、対人コミュニケーション論において、ポライトネスをより広い観点から体系化しようとするものである。円滑な人間関係を維持・確立するための言語行動としてのポライトネスだけではなく、「無礼」「怒懣無礼」といった行動をも、マイナス・ポライトネスとして、一つの枠組みとして捉える。

第二言語の会話においても、情報を伝達するだけではなく、円滑なコミュニケーションが行えるようになることも必要である。ディスコース・ポライトネス理論の観点から、言語教育を考えると、目標言語において円滑なコミュニケーションができるようになるということは、特定の談話の基本状態を適切に見積もることができるということであると考えられる。換言すれば、自分が行う言語行動のフェイス侵害度を「聞き手が行うフェイス侵害度の見積もり」と一致させ、適切な有標行動を行うことができることであると考えられる。フェイス侵害度の見積もり差が0かずれ幅が許容範囲であれば、マイナス・ポライトネス効果は起こらないからである。

2.2 でも触れたように、基本状態の違いは異文化間コミュニケーションにかかわってくる。従来の異文化間コミュニケーション教育においては、文化ごとの言語行動の連鎖の違いを提示することが一般的であった。例えば、依頼行動においては、

中国ではすぐに依頼を切り出すことが「一般的」であるため、中国語母語話者が日本語で依頼を行うときそのように行動する可能性がある、ということを示していたのである。

しかし、本稿で論じてきたように、ポライトネスの効果は一直線上で捉えられるものである。中国語会話に見られたような前置きや状況説明のない依頼でも、見積もりが一致すれば、日本人に許容されることもあるだろう。当該談話の基本状態を把握し、対面している相手との見積もり差を一致させるようにするには、相手の文化的背景だけではなく、相手との関係性や発話時の状況といったさまざまなことが判断の要素となる。

そのようなさまざまな要素を見極められるようになるには、コミュニケーションの場を体験することが必要である。そこで、実際の自然会話におけるさまざまな場面を、教材として提示することが有効になる。なぜなら、「基本状態」を見積もる必要がある要素は、「発話連鎖」であったり「スピーチレベル」であったりと多岐にわたり、会話のあらゆるところにあるからである。また、教材作成者が気づかない点に、学習者が気づく可能性もあるだろう。それらを教材作成者が人為的に再現するのは難しい。そのため、教材の素材そのものは、人為的に創作されたものではないことが必須なのである。このように、対人コミュニケーション論としてのディスコース・ポライトネス理論の観点からは、第二言語における円滑なコミュニケーション方法を修得するということは、あらゆる言語行動を目標言語の「基本状態」に近づけることでありと解釈することができる。そのためには、自然会話を教材として利用することが必須となるのである。

第二部では、自然会話におけるやりとりが、創作された会話と異なるといことを具体的な例を挙げながら論じる。

引用文献

- Brown, P. & S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 謝オン(2000)「依頼行為の日中対照研究」東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文
- 謝オン(2001)「談話レベルからみた『依頼談話』の切り出し方—日本人大学生同士と中国人大学生同士の依頼談話から—」『日本研究教育年報 2000 年度版』、東京外国語大学日本課程・留学生課共編、77-101.
- 宇佐美まゆみ (1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662、昭和女子大学近代文化研究所、27-42.
- 宇佐美まゆみ (1998)「ポライトネス理論の展開：ディスコース・ポライトネスという捉え方」『日本研究・教育年報 1997 年度版』、東京外国語大学日本課程編、147-161.
- (1999a)「視点としての日本語教育学」『月刊言語』28(4)、大修館書店：72-80、9 頁.
- (1999b)「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ—」『日本語学』18(10)、40-56.
- (2001a)「ポライトネスの談話理論構想」『談話のポライトネス』国立国語研究所編、凡人社、9-58.

- (2001b)「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること—」『語学研究所論集』6、東京外国語大学語学研究所、1-29.
- (2001c)「二一世紀の社会と日本語」『月刊言語』第 30 巻第 1 号、大修館書店、20-28.
- (2002)連載「ポライトネス理論の展開 1-12」『月刊言語』31(1-13).
- (2003a)「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成 13-14 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C (2) 『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』(課題番号: 13680351) (研究代表者: 宇佐美まゆみ)、研究成果報告書、4-21.
- (2003b)「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『国語学』54(3)、国語学会、117-132.
- (2006)「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2005 年 2 月 25 日版」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』、東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、21-46.
- Usami, Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Hituzi Syobo.

付録

文字化資料で用いられている記号凡例 宇佐美 2006 より抜粋

- 。 [全角] 1 発話文の終わりにつける。
- 、 発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。
- 、 [全角] 1 発話文および 1 ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。
- 発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
- ? 疑問文につける。
- ... 文中、文末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。
- 「 」 トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護ために明記できない単語を表すときに用いる。